月刊

こころのとも

第十四巻
十月号

多くの日本人

苦労を知らない　専心勤労も
金満家の子どもたち　質素倹約も
自意識だけは強く　他心感応も
名誉心・権勢欲は　聖道修証も
旺盛だが　みんなみんな
危機感もなければ　忘れている
労働意欲もなく
何事も自堕落に
やっているだけ

家庭の悩み

かって
家庭の悩みは
嫁と姑の確執であった

でもいまは
母と子の対立による
心理的ストレスが中心だ

人生を考え直して
みたい人は（一一七）
―空海『即身成仏義』解説（二〇）―

〔（6）―3　『観智儀軌』の法身真如観〕

また云く、

「法身真如観に入って、一縁一相平等なること、猶し虚空の如し。もし能く専注して無間（のけん）に修習すれば、現生（げんじょう）に即ち初地（しょじ）に入り、頓（とみ）に一大阿僧祇劫（いちだいあそうぎこう）の福智の資糧を集む。衆多の如来に加持せらるるに由るが故に、乃（いま）し十地・等覚・妙覚に至って薩般若（さはんにゃ）を具し、自他平等にして一切如来の法身と共に同じく、常に無縁の大悲を以て、無辺の有情を利楽し、大仏事（だいぶつじ）を作（な）す」と。

今月号の現代語訳は、頼富本宏著『日本の仏教2　空海』（筑摩書房刊）から、引用させて頂きます。

＊　＊　＊　＊

また、『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』に、次のように説く。

「さとりの当体である仏身を真理にほかならないとする観想に入るならば、主観と客観が平等にして区別がなくなることは、あたかも虚空のごとくである。もし、よく専念して、絶え間なく修行したならば、この身このままで、すぐに菩薩の修行すべき十段階〔十地〕のうち最初の段階に入り、すみやかに、本来は無限の時間を必要とする福徳と智慧の功徳を集めることができる。

数多くの如来の不思議な力を加えられることによって、より高位の十段階に至った菩薩・さとりの内容が仏と等しい菩薩・妙（たえ）なる智慧がそなわった位のものに至るまで、あらゆるものを知る智慧をそなえ、自己と他者とが完全に平等にして、すべての如来のさとりの当体と同じく、常に分けへだてのない広大なる慈悲でもって、かぎりなき生きものに利益を与え、安楽にし、偉大な仏としての活動〔大仏事〕を行うのである。」

＊　＊　＊　＊

この現代語訳を読みますと、さして難しい言葉はないように思えます。どの言葉も、既にこれまでに出てきたことがあると思います。でも、ここでも深い真理が述べられています。

最初にあります「さとりの当体である仏身を真理にほかならないとする観想に入り」、仏と一体になることを、真言密教では、入我我入と呼びますが、それは、既に、紹介した通りです。そうなった時、「主観と客観が平等にして区別がなくなること」も、すでに解説したと思います。主観は自己ですし、客観は他己です。その無意識での統一が、入我我入の状態なのです。そうした境地は、「あたかも虚空のごとく」である、というわけです。

この「虚空」という言葉を見て、私は、確か『釈尊のことば—法句経解説—』で、これを取り上げたことがあったことを思い出しました。そこで、最初の（一）から最後の（四二三）まで一つひとつ偈を読んでみました。

やはり、この虚空という言葉で表している内容と同じことを意味した言葉がみつかりました。それらは、以下に紹介します七つの偈に含まれています。それらを解説しました年と号を付記しました。よく味わい、その年・号のところをご参照いただければ幸いです。

（九二）財を蓄えることなく、食物についてその本性を知り、その人々の解脱の境地は空（くう）にして無相であるならば、かれの行く路（＝足跡）は知り難い。—空飛ぶ鳥の跡の知りがたいように。

（九三）その人の汚れは消え失せ、食物をむさぼらず、その人の解脱の境地は空（くう）にして無相であるならば、かれの足跡は知り難い。—空飛ぶ鳥の跡の知りがたいように。（以上二つの偈は平成六年六月号で解説）

（一七五）白鳥は太陽の道を行き、神通力による者は虚空（そら）を行き、心ある人々は、悪魔とその軍勢にうち勝って世界から連れ去られる。（平成八年八月号で解説）

（一七九）ブッダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。ブッダの境地はひろくて涯（はて）しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか。

（一八〇）誘なうために網のようにからみつき執着をなす妄執は、かれにはどこにも存在しない。ブッダの境地はひろくて涯（はて）しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか。（以上二つの偈は平成八年十月号で解説）

（二五四）虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、（道の人）ではない。ひとびとは汚れのあらわれをたのしむが、修行完成者は汚れのあらわれをたのしまない。

（二五五）虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、（道の人）ではない。造り出された現象

が常住であることは有り得ない。真理をさとった人々（ブッダ）は、動揺することがない。（以上二つの偈は平成十年十月号で解説）

本文に戻って、もう少しだけ解説しておきます。まず、仏と同じ解脱の境地に至った者は、「自己と他者とが完全に平等にして、すべての如来のさとりの当体と同じ」という部分ですが、これを、私の理論で言いますと、無意識での自己と他己が統合されます（密教では入我我入と呼ぶ）と、自分と他のあらゆる存在、つまり物質とも生命とも精神（人）とも、すべてと一体であると感じることができるようになるのです。体験がない人には、そうなると信じて頂く以外ないのですが、不思議にもそう感じるのです。そうなりますと、「常に分けへだてのない広大なる慈悲でもって、かぎりなき生きものに利益を与え、安楽にし、偉大な仏として活動を行う」ことができるようになるのです。

『観智儀軌』に、以上のように説かれている、とお大師さんが仰っても、今や法を求めていない現代人には、通じないのかもしれません。日本で、いな世界で「民主主義ではもうどうにもならない」という状態に至らなければ、通用するようにはならないのかも知れません。そうなりますと、世界中で大きな混乱が起こるのですが。

自作詩短歌等選

修羅の世界

アメリカは
世界中を

自由競争
市場原理至上主義
グローバリゼーション

で修羅の世界にしている

アメリカさん
どこまで行くつもりなの
世界は混乱の極致に
至りますぞ

でも
情けないことに
飼い犬のように
日本も
しっぽを振って
のこのこ
ついて行っているが

衆愚政治は必然

民主主義は必然的に
衆愚政治に陥る

なぜなら
自己への執着を
よしとする制度の中で
みんなだんだんと
堕落していくから

癒されない

ヒーリングや
ストレス対策などの
癒しで
癒されない人が
多いという

そんなこと
当たり前じゃないの
人は人によってしか
心底
癒されることはないのさ

信じられない政治家

ある世論調査によると
いま若者で
政治家を信用する者は
たったの一％だという

また
別の調査（？）によると
最も就きたくない
職業の第一位が
政治家だという

先生先生と呼ばれ
頼みごとをされて
お金をもらい
いい気になっている内に
将来を背負う若者は
まったく政治家を
信じなくなってしまった

どう
取り戻せるのか
小泉さん

憲法金科玉条主義

ある弁護士は
凶悪犯罪を犯した少年を
厳罰に処しても
誰も救われないという

規範を守るべき
弁護士が
屁理屈を弄して
社会規範の崩壊を助ける
言動をする

権利の主張を
中心原理とする憲法を
金科玉条とし
人倫（＝法）を
ないがしろにしていく

誰が
社会秩序を守るのか

アフリカに残されたもの

アフリカは
いま病んでいる

腐敗エリートは
権力の椅子取りゲームに
没頭し
民の飢えに配慮しない

民族間紛争は
多くの虐殺を生んでいる
エイズは
多くの国で蔓延している

植民地からは解放された
が
民主主義的エゴ追求原理
は
残され
それ以外の精神文化
特に信仰・宗教は
残されなかったから

危機意識の薄い日本人

日本人は
何事においても
危機意識が薄い

子育てでもしかり
ほうぼうで
子どもがさらわれ
被害を受けているのに
子どもたちだけの行動に
無関心なのだ

駐車中の車への子の放置
子ども一人でのお使い
小学校への一人での登下校
大人のいない集団登下校
子どもたちだけでの
繁華街での遊び

これらは
これまでの被害の
現場なのだ
日本人よ
もっと子どもに関心をもて
もっと子どもを大切にせよ
そうしないと
被害はまだまだ出るぞ

文科省はアリさんか

文部科学省が
看板を書き換える
「ゆとり教育」から
「学力重視」へと
まさに
あっち行って♪
ちょんちょん♪
こっち来て♪
ちょんちょん♪

社会病理の現れ？

なぜなのか
殺人・強盗
ぐんと増え
検挙する率
ぐっと減りけり

インテリの狂信

大学の
教官までも
カルト教
信じる時代
人々が
真の信仰
失いしあかし

糖尿病の蔓延

このところ
糖尿病が
ぐっと増え
五十以上では
三割となる

健康三原則

①バランスのよい食事
②毎日の軽い運動
③ストレスの管理

に気を配ろう

自作随筆選

倫理の基盤はどこに

大阪教育大学付属池田小学校に乱入して、八人の児童と教師を含む十五人に重軽傷を負わせ、殺人罪などに問われていた宅間守被告に対して、少し前になりますが、先々月の八月二十八日、大阪地裁で、死刑の判決が下されました。

翌日二十九日の毎日新聞「余録」欄（朝日新聞では天声人語にあたる欄）は、このことを取り上げ、人間は、なぜ、こうまで非人間的なことができるのかを、哲学者・永井均著『これがニーチェだ』（講談社刊）という本から引用しながら、問うていました。そこには、次のように述べられていました。

「▲哲学者の永井均さんは『なぜ人を殺してはいけないか』という問いを考察し、『私には愛する人などいないし、いつ死んでもかまわない』という人に倫理は無力だと述べている。まず、自分の生を根本のところで肯定することこそが、あらゆる倫理の基盤なのだ（『これがニーチェだ』）▲だから子供には道徳を教えるより先に、人生が楽しいということ、自分の生が肯定されるべきものであることを体に覚えこませるのが第一だともいう。むろん、宅間被告の心の軌跡は分からない。ただ、かくも非人間的な所業も人間の仕業なのだという悲しく苦い現実をかみしめるしかない」と。

この文章を読んで、私は、こう考える人が多いからこそ、ますます、第二、第三の宅間守が生み出される可能性が大きくなるのだと思ったのです。

私は、倫理の基盤は、「自分の生をどこまでも肯定する」ところにではなくて、逆に「自分を捨てて、他を尊重し、他を愛する」ところにこそあると思うのです。

何度も書いたと思うのですが、人間が「精神」として健康に育つためには、まず第一に「愛情」が要ります。それは、無意識の信仰の領域に属するものなのですが、現実には、「自分を犠牲にしても子供に尽くそう」とする行為として現れます。そうした行為は、養育する人のあらゆるエゴの主張を超えているのです。子供に対する絶対で無条件な関心に基づいていなければなりません。自分の欲求や期待で、子供への関心が曇ってはならないのです。子供の存在の絶対的な肯定であり、支持なのです。例えば、次のようにどんな条件が付いてもいけないのです。よい子だから、よく言うことをきく子だから、

賢く、よく勉強できる子だから、可愛い顔をした子だから、運動能力が発達していてスポーツ万能な子だから、手先が器用な子だから、自分によく似た子だから、健康で元気がよい子だから、愛するといった、いかなる条件がついてもいけないのです。こうしたいかなる条件もつけない子供への絶対的な関心が、子供の人間としての存在の土台を作るのです。こうした人間存在への絶対的な支持を受けるとき、はじめて人間は他者を心から信頼し、愛することができるようになるのです。他者と真に心を通わす「情動の共有」やコミュニケーションが可能となるのです。

ここに、まず第一の倫理の基盤があります。

しかし、人間の精神が健全に育つためには、愛情だけではだめなのです。さらに、こうした愛情の上に、第二に、子供が「自由」に行動できる時間と空間が保障されなくてはなりません。子供がしたいことをやれる条件が整えられなければならないのです。その時、子供は自分で計画し、その行動を自分で評価し、それに満足を感じて成就の喜びに浸ったり、あるいは、不満を持って、もっと新たな行動を計画したりするのです。勿論、そうしたときの成功や失敗への養育者の情動の共有が必要なことは言うまでもありません。そうした、子どもが主体になって積極的に行動することが大切なのです。そうすることで、人の「自己」が育ちます。つまり、自己信頼感（いわゆる自信）がつきます。そうしますと、困難に出会ってもくじけず、根気強く自分の努力でそれを克服しようとする気力が養われてくるのです。しかし、そうなるためには、養育者からの温かい「愛情」を受けている必要があります。そうしないと、真の自信、地に着いた自信にはならないのです。行き過ぎて自信過剰になったり、わがままに、やるときはやるが、嫌になったらやらない、といった自堕落に陥る危険があるのです。

さらに、自己信頼感がついただけではまだ、不十分です。こうした愛情と自由が満たされたのち、第三に、他者のために我慢して、つまり「忍耐」して何かをすることが求められなくてはなりません。多くは、誰かが負担しなければならない家事の手伝いです。そして、そうした手伝いをした時、養育者の側は、それに対して感謝の念を示さなくてはなりません。そうすることを通じて、自分の存在や行為が、誰か他者の役に立っていることを身をもって感じ取ることができるのです。そして、そう感じることで「他己」が育って行くのです。自分を抑えて、他者を尊重する心が育って行くのです。孔子でいえば、「仁」の徳が育つのです。

ここに、第二の倫理の基盤があります。

しかし、それが可能となるためには、前提として必要なことがあります。それは、養育者の言いつけに従って、いやなことでも「忍耐」して成し遂げる「自己」が育っていなければならない、ということです。

私は、人として最も大切なことは、最終的に「他己」が育っていることだと言っています。意識水準では、それは、「人の心を感じるこころ」です。人の痛みを我が痛みとし、人の喜びを我が喜びとすることができる「こころ」です。

話を引用文の検討に戻して、では、「宅間被告の心の軌跡」はどうなっているのでしょうか。そのことを以下、少し検討してみたいと思います。

以上述べました、私の理論から見ますと、宅間死刑囚（死刑が確定しましたので死刑囚と呼ぶことにします）は、人間として欠くことのできない「他己」が全く育っていません。他者のことに配慮すること、つまり、人の痛みや喜びを我がものと感じることが全くできないようです。なぜ、こうなってしまったのでしょうか。

まず、第一には、人間存在（自分の存在）を肯定することにとって基礎となる、前述のような「愛情」が与えられなかったのではないかと推測されます。彼の経歴をみますと、彼は何をしても自己充実感が得られなかったようです。人を信じられず、自己の殻に閉じ、自己の存在に対して、常に不安をもっていたと考えられます。誰からも肯定的な支持が得られなかったのではないでしょうか。ですから、極めて情緒不安定であり、かつ、自己中心的で、他者に敵対的であった、と思われます。自分の思いどおりにならないことや、不愉快なことがあれば、全て他者の所為（せい）だと考えたようです。それは、彼の裁判の判決要旨に明らかです。その言葉は「極端なまでに自己中心的で独善的であり」「他罰的」だとなっています。確かに、彼も、人を傷つければ人は痛いと感じるだろうことは、知っていたと思います。しかし、彼は、それを自分の痛みとすることができなかったのです。

愛情を欠きますと、知識としては、他者のこころを知ることはできますが、真の他己が育ちません。また、他己が育たないだけではなく、実は、自己そのものも育たないのです。

自己の根源は、生きていこうとする力、つまり生命力ですが、愛情が与えられませんと、この力も育たないのです。ですから、宅間死刑囚は、何をしても長続きしていません。勉強も、仕事も、結婚も、すべてが、いわば刹那的です。彼の心のなかには、ずっと続けたいという

思いはあったと思いますが、少しでも思い通りにならなかったり、困難に出会ったりしますと、直ぐに、くじけてしまったり、やけくそを起こしてしまうのです。退行し、逃避するのです。例えば、精神病（彼の場合は統合失調症）への逃避です。病気のふりをして、弱い自己を守ろうとするのです。また、死への逃避が起こります。自殺願望です。でも、それすらも、自分一人で決行することはできないのです。逆に、自分の不甲斐なさの裏返しとして、他者への強い羨望（劣等感）が沸き上がってきます。こうして、自分の不甲斐なさを他者のせいにして、他者を攻撃したくなってくるのです。そうなりますと、他己が育っていませんので、平気で他者を殺傷するようなことができてしまうのです。これが、私の「宅間被告の心の軌跡」に関する推測であり、解釈です。

宅間死刑囚は、極端な愛情欠乏症の例ですが、現在の日本人は多かれ少なかれ、こうした傾向をもっています。なぜなら、日本の家庭から真の愛情が消えて来ているからです。かつて、書きましたように、自分の産んだ赤ん坊におっぱいを触られて「ぞっとした！」と告白する若い母親に、多くの人が共感するということがありましたが、そういう時代です。また、赤ん坊にとって母親の喫煙はよくないと医者に言われて、喫煙を止めるのではなく、母乳を止め、人工乳に変えたりする時代です。また、乳幼児への虐待は増える一方です。子供に愛情があるとはとても思えません。

そこまで極端ではなくても、日頃、スーパーなどの駐車場で子どもだけを車内に放置している光景は、どこへ行っても見られます。子どもへの関心の薄さを示すものです。また、最近、小学生の女の子が拉致される事件が頻発していますが、これも、子どもから目を放す大人たちの関心の薄さが一つの原因になっているのではないでしょうか。

信仰や宗教を失い、民主主義のみを自分を依拠させる思想の下では、愛情は、自己を追求するための愛、「愛欲」になっているのです。引用文の中に「私には愛する人などいない」とありましたが、ここで言う愛は、自己を捨てた愛ではありません。自己愛の裏返しとして、他者に向けられたエゴいスティックな愛なのです。

人間が信仰や宗教に裏打ちされた真の愛情を欠くとき、人間は倫理や道徳の基盤を欠いて、行動は予測できないものになって行きます。宅間死刑囚は「人格障害」と精神鑑定されていますが、それは、真の愛情を欠いた者の陥る人格（人間性）の崩壊です。精神病よりもずっと社会の混乱を招いて行くことになる、と思います。

釈尊のことば（一二六）

―法句経解説―

（三八二）たとい年の若い修行僧でも、仏の道にいそしむならば、雲を離れた月のように、この世を照らす。

この偈には、まったく難しい言葉は、出ていません。でも、今や、この偈に書かれたことを信じるかどうか、が多くの修行僧（日本で言いますと、各仏教宗派内で修行している若き修行者）に問われているように思えます。

また、この偈は、直接的には、修行僧について書かれていますが、なにも修行僧に限ったことではありません。なにがしか、よい人間になろうとしている人、例えば、教育基本法の第一条にありますように、人格の完成を目指している「教師」にも、当然、当てはまります。その他、人の上に立ってリーダーシップを取ろうとする人には、多かれ少なかれ、求められている偈だと思います。

さて、少し解説しておきます。

この偈の中心は「仏の道にいそしむならば」という部分です。

「仏の道」とは何かですが、それは、仏、つまり釈尊の説かれた教えです。その教えを信じて、ひたすら修行することが「いそしむ」ということです。

ここで、大切なことは、教えを信じることですが、とても難しいことです。

なぜかと言いますと、現代が自己化した社会だからです。その総仕上げは「民主主義・自由主義」です。

この制度の下では、自己に執着することがよいことであると教えています。釈尊は、自己への執着を捨てることを説かれています。民主主義とは、まったく逆のことを説かれているわけです。ですから、いくら信じろと言われても、自己への執着が強いですから、「あたま」で分かったとしても、心の底から信じることはできないのです。実は、信じるとは、すでに自己を捨てたところに、はじめて生まれる心の働きだからです。民主主義のように自己を追求することばかり教えられてきた人たちにとっては、自己への執着を捨てることは、至難のことなのです。

ですから、多くの新宗教は、自己への執着を強めるようなことを言って、布教しています。それは、信仰や宗教とは逆のことをしていることになっているのです。

自分に閉じて、自分を守るのではなくて、他者にこころを開いて、教えを信じ、ひたすら修行して下さい。

後記

一、九月に入り、真夏のような日が続きましたが、急に寒くなったりしました。何かしら、異常気象を感じます。

二、先月号の「空海―『即身成仏義』解説」で、また、間違いを犯しました。三頁四行目に空白がありますが、そこには、次の漢字が入ります。「ボロン（本当は漢字です）」です。申し訳ありません。ご訂正下さい。

三、先日、ある私立大学の学園祭（文化祭）を見る機会がありました。そこで、ある展示会場にいた学生さん三人と親しく話をすることができたのですが、その人たちは、とても明るく、私が勤める大学とは一味違う雰囲気を感じました。その後、学長さんともお会いすることができ、最近の私学の情勢を聞かせて頂きました。

四、来年度から、国立大学も親方日の丸から、独立行政法人に移行します。でも、私学と違って、大した危機感もないようで、自民党や政府の考えるとおりになりそうです。つまり、国立大学にも「自由競争の原理」を導入して、よい大学は一層充実させるが、だめな大学は淘汰しよう、というねらい通りになりそうです。果して、これで日本の大学や学問が隆盛するのか、私には、極めて疑問に思えるのですが。

五、日本の大学が堕落したのには、多くの原因があると思います。一つは、国立大学教官が余りにも低い所得に放置されていることです。ある部分では、高校以下の教員よりも低くなっています。アメリカの大学教員の十分の一だというのを聞いたこともあります。これでは、よい教官が集まらないのも無理はないと思います。なにせ、人の価値が所得の額のみで測られる世ですから。「金はやらないが、暇をやっているではないか」ですって。道理で、外では稼ぐが、本業の研究・教育では、「怠けとごますり（政治）」が蔓延するのですかねぇ。

六、すべてのカボチャを収穫しました。沢山、とれました。発泡スチロールのリンゴ箱に詰めて保存しています。

月刊　こころのとも　第十四巻　十月号　（通巻　一六六号）

平成十五年十月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号01610―8―38660